

博士学位請求論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 青山 拓央

論文題目 分岐する時間——自由意志の哲学——

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 柏端 達也
文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部教授 斎藤 慶典
文学研究科委員

副査 青山学院大学教育人間科学部教授 入不二 基義

論文概要

本稿は、「自由意志」をめぐる伝統的な哲学の議論に対し、著者の青山君が独自に培ってきた時間論や様相の形而上学、倫理学における考察をふまえ、新たな観点からの再定式化と解答を行なったものである。青山君は、自由意志の問題が、自由とは何かといった議論以前に、より一般的な、より純化された形のアポリアとして再定式化可能であることを示す。それが「分岐問題」と彼が呼ぶ問題である。分岐問題は、決断の時点が、ひいては「決断」そのものが意味をもちえないという、すぐれて哲学的なアポリアである。本稿は全体として、その問いに、複数の観点から答えを与えていくという構成をもっている。青山君は、分岐問題の観点から、いわゆる自由意志論を整理し、従来の議論において中心的役割を果たしてきた「両立可能性」や「責任」といった概念にまつわるいくつかの混乱を指摘する。また、現代流布している様相概念（可能性概念）の基礎に対しても反省的な考察を行ない、それらに対してオルタナティヴをもたらさうる様相についての哲学的解釈が提案される。さらに、著者が自らの問題に答えるために最終的に与えた世界観は、意志の自由に関してわれわれが抱きがちなある種の「幻想」から解放された道徳概念をも提供しうるものとなる。

論文の構成は次のとおりである。

序文

第一章 分岐問題

- 1 導入
- 2 問題の構造

- 3 準備的応答
- 4 作用と決定
- 5 多世界説
- 6 単線的決定論
- 7 現実主義と可能主義
- 8 解決

第二章 自由意志

- 1 概要
- 2 意志と主体
- 3 何かからの自由
- 4 分岐図の外へ
- 5 両立的自由
- 6 両立的責任
- 7 偶然の自由
- 8 それぞれの値段

第三章 実現可能性

- 1 時間と様相
- 2 スコトウスとアリストテレス
- 3 論理的可能性
- 4 タイプからトークンへ
- 5 現実と可能性の紐帯
- 6 言語的弁別
- 7 過去可能性
- 8 補遺

第四章 無自由世界

- 1 他我問題の反転
- 2 ストローソンとデネット
- 3 二人称の自由
- 4 なぜ道徳的であるべきか
- 5 擬人化される脳
- 6 フランクファート・ケース
- 7 自由とは何だったか
- 8 悟りと欺き

補論

- 1 時制的変化は定義可能か——マクタガートの洞察と失敗
- 2 無知の発見——猫の懐疑とウィトゲンシュタイン

- 3 叱責における様相と時間
- 4 指示の因果説と起源の本質説

各章の概要

いわゆる「自由意志」の問題をテーマとした本学位請求論文は、全四章から成っており、第一章で著者が定式化した主問題に対し、残りの三章でそれぞれ異なる角度から答えを与えていくという構成をもっている。そしてそれら主要な四章の補論として、末部に、関連するテーマを論じたいいくつかの論稿が添えられている。

各章の概要は以下のとおりである。第一章では、本稿が主として取り組むことになる最も大きな問題、「分岐問題」が、定式化される。自由意志の問題は、著者によれば、これまで自由と決定のあいだの対立図式のもとで論じられる傾向にあった。著者である青山君の意図は、「自由とは何か」という議論からいったん離れて、より一般的な観点から問題を純化し、再定式化することにある。青山君はまず、諸可能性からの現実の選択というきわめて一般的な概念に注目する。そして、その概念がまさに本質的なアポリアを含むものであることを指摘する。

分岐問題の簡単な記述は以下のようなものである。常識的に、われわれは、さまざまに展開しうる可能性のうちの一つを自らの決断によって選択している、と考えることができる。そしてそれらの可能性は、無数に分岐していく“歴史”として自然に思い描くことができる。青山君の論じるところによれば、以上の図式を額面通りに維持することはできない。その不可能性は、第一に、決断の時点の位置づけの困難さとして表現される。もし決断が分岐と同時（あるいはそれ以前）であるならば、分岐するいずれの世界にもその決断が含まれるため、枝の片方のみが選択されたという非対称性が、その決断によっては説明されないことになる。もし分岐の時点よりも後であるならば、決断は分岐そのものに関与していないことになり、やはりその決断によって選択されたと言うことができなくなる。以上は分岐問題の端緒にすぎないが、そこからは、「決断」や「選択」がそもそも本来の意味をもちうるのかという根底的な哲学的懐疑さえもが導き出されることになる。

分岐問題という形への定式化は、自由意志をめぐる従来議論——たとえば今日最重要視されるものの一つであるP・ヴァン・インワーゲンによる研究など——に対する反省的考察でもある。また、それはさらに、その純化された形式ゆえに、自由と決定とを対置するおなじみの図式のみならず、自由と非決定との対立や、確率的法則の諸解釈に対しても、共通の枠組みのもとで論じることを可能にするような問題設定を与えてくれる。

第二章において青山君は、自由意志や両立的自由についての諸説をふまえ、「自由とは何か」という根本的な問題を扱う。土台となるのは第一章で定式化された分岐問題に対するある観点からの考察である。この第二章ではまず、「自由意志」の概念が伝統的に含むと考えられてきた起点性や他行為可能性といった特徴が吟味される。そうして、自由と責任に関するさまざまな学説が整理され、検討される。

青山君がとくに注意を促しているのは自由論と責任論との混同である。青山君の指摘によれば、両立的自由が問題にされるときに考慮されてきたのは、しばしば、決定論との両立性ではなく、他行為不可能性との両立性であった。そしてそれはさらに、有名なフランクファート型事例の検討を通じて、非常にしばしば、他行為不可能性と責任との両立性の議論へと変質してしまう。青山君は、そうした混同が自由意志の議論にもたらす弊害を明るみに出す。

第三章は、様相——可能性、必然性——についての時間論的考察である。ここまでの章で著者は、自由を、諸可能性からの選択という一般的な図式との関連で考察してきた。第三章では、その「可能性」の概念そのものが問題とされる。この章で行なわれるのは、様相概念の基礎に関する哲学的反省であり、現代流布している理解に対するオルタナティブの提示である。青山君は、論理的可能性を基礎にした静的で量化的な今日の様相理解に対し、実現可能性をより自然な基礎にもつ様相概念の妥当性を検討している。論理的可能性に対して実現可能性を先行させるこの試みは、哲学史的には、ドゥンス・スコトゥスからアリストテレスへの回帰と見なすことができ、それと同時に、クリプキを（『確実性の問題』における）ウィトゲンシュタインへと接続する試みでもある、と青山君は主張する。

最後の第四章では、本稿の考察がもつ倫理的な帰結が示される。第四章における議論は、P・F・ストローソンの自由論をある種の出発点としているが、最終的に「無自由な世界」と著者が呼ぶ独特の描像へとたどり着く。著者によれば、自由と不自由というおなじみの対立図式——そしてその図式に基づく、たとえば「人間はじつは自由ではなく脳に支配された不自由な存在である」といった考え——は、まだ、そしてむしろ、自由意志の孕む「幻想」にとらわれたものである。本稿の一つの帰結として、著者の青山君は、そうした自由と不自由の対立の外側にある「無自由 (afree)」な世界を描き出している。そこにおいては、諸可能性の一つを自由に選びとる主体も、諸可能性の一つを不自由に押しつけられる客体も、もはや存在しない。青山君は、本稿がもたらすそのような意外とも言える描像に対し、われわれが——実践的な世界に生きるわれわれが——どのような態度をとるべきかについて、検討を加え、独自の示唆を行なっている。

審査要旨

「自由意志」をめぐる論争の歴史は長く、見方によっては哲学史と同じくらいの長さがあるとも言える。さまざまな文脈でさまざまな議論がこれまでになされてきたが、現代においてもなお（というより20世紀の後半以降とくに）「自由意志」は哲学の中心テーマの一つでありつづけている。本学位請求論文において著者の青山君は、そのような自由意志論の長大な伝統に対し、独自の観点から問題の新しい定式化を行ない、それに答えるなかで関連する複数のトピックについて独創的な議論を展開して見せている。

全体として本稿をとくに評価しうる一つの点は、そのバランスの良さである。す

なわち本稿は、伝統を尊重しつつ哲学の諸問題に検討を加える一方で、それらを画期的な仕方でも横断・包括する斬新な視点を提出している。地に脚の着いた堅実さと飛翔するような独創性とは、たがいに打ち消しあうことなく、自然な調和のもとに共存している。このバランスは、著者による巧みな叙述と態度設定、そして計算された論文構成によってこそ実現できたものだと言える。

第一章はとりわけ、著者の独創的な問題設定が活かしている。そこでは、いわゆる「自由意志」——青山君は伝統的な論点を中立的に想起させるこの語をあえて用いるのだが——をめぐる諸問題が内包する論理的な中核の部分が抽出される。それが彼の言う「分岐問題」である。分岐問題を青山君が抽出する仕方は、慎重かつ周到なものだが、同時にそれは、読者にとって意味ある批判が可能であるような明瞭さを備えたものでもある。分岐問題を描き出すための魅力的な具体例はまた、論証に説得性を与えている。この分岐問題という純粋な形態においてはじめて、自由意志をめぐるこれまでになされてきた錯綜した議論に正確な構造が与えられ、その一般的な問題点が明らかにされるのだ。じつは自由意志の問題がこのような純化された形で提示されたことは今までになく、分岐問題の定式化はこのテーマに興味をもつ多くの研究者にインパクトを与えるだろう。もちろん青山君自身にとって、この第一章の手続きは、後の章がそれに対する解答になっているという点で、論文の構成上とても重要なものである。

第二章と第三章は哲学史的な観点の比重が比較的高い章である。第二章では、自由に関する20世紀の半ばからの分析哲学の議論が主として検討される。細分化され専門化した諸議論を整理して要点をつかみ取る著者の手腕は見事であり、論争史の叙述としてもそれは啓発的な部分を多く含んでいる。もっとも、第二章は議論の単なる交通整理にはとどまらない。また、「自由とは何か」という大きな問いをそのまま引き継いでいるわけでもない。青山君は、分岐問題を定式化した純粋な立脚点から、問いそのものを検討しなおし、自由をめぐる従来の論争に対して画期的な論点を提出している。その一つが、自由論と責任論との明確な区別であり、今日当然と見なされているいくつかの前提を不純物として避けることである。そこにはもとより、発展し複雑化した議論がはまりがちに陥穽を指摘していくという、青山君の一貫した姿勢が見てとれる。

この第二章に関して特筆すべきは、両立論や行為者因果説といった特定の哲学的「看板」を安易に利用することなく（既存の狭い店構えをあえて放棄し）、むしろそれらのすべてに対してほぼ中立的な態度をとっていることである。そのような態度によって、この章は従来の議論に対する新鮮な反省的考察となりえている。

第三章では、様相および時間の主題と自由意志の主題とを横断する形で、第二章より広い観点からの議論が展開される。そこで青山君は、今日一般的なものとは異なる、実現可能性を基礎にした様相概念の理解を提案している。その提案は、哲学史的には、ドゥンス・スコトゥスからアリストテレスへの回帰であり、クリプキのウィトゲンシュタインへの接続であり、さらに、現代の様相論理学の基礎に関する一つの斬新な考察であると言える。第三章の提案はそのように斬新なものであるが、

その記述はけっして煽動的でなく、ありうるさまざまな批判を十分に想定した公平なものである。

第四章では、自由の概念の成立可能性の条件を問うことにより、著者独自の「無自由な世界」が描き出される。この章は、本稿の帰結の道徳的側面を、これまでの章とはやや違う角度から扱った章である。実際、前章までの分析的なトーンからすればやや意外な、思弁的とも言える考察がそこでは展開されることになる。しかし他方で、第四章は、本稿のそこまでにおける議論の方向性と収斂点がいっきょに語られる章でもある。したがって本稿全体を、それがもつ意義を明示しつつ、まとめあげる役目を果たしている。第四章において提出された見取り図は、自由概念をめぐるわれわれの見方を根底から揺さぶる力をもっており、今後さまざまな仕方で論じていく価値のあるものである。

以上のように、本稿は、それを構成するいずれの章も審査員によって高く評価される一方で、それがもつ論争喚起力の強さのゆえか、いくつかの根本的な疑問を提起させることになった。たとえば、第三章の実現可能性概念と結びついた時間のあり方の理解に対しては、連続創造説的な生成概念に基づく時間理解（“現在”の理解）が代案として示唆された。そして、代案の理解のほうで、「偶然」のもつ無根拠さを適合的に説明できるのではないかという意見が出された。その代案はまた、第四章の無自由世界に対するわれわれの態度に関しても、異なる含意をもちうるものであろう。あるいは、第四章で示された描像について、著者は「無自由」の領域を図式の外部に置きすぎているという批評があった。すなわち、その図式とは自由に関するわれわれの常識的理解可能性を表現する図式なのであるが、著者が探究する「無自由」は、実際には、われわれの常識を構成する基本概念へと接近または侵蝕しうるのではないかという指摘がなされた。これは、著者の与える見取り図に対し根底的に異なる解釈となりうるものであり、ひいては、著者が第四章で示す実践的態度に対する代替案となるかもしれない指摘であるだろう。なお、比較的些細な点としては、『分岐する時間』という魅力的なタイトル自体に、本稿の内容との厳密な対照において、ややミスリーディングな部分があるのではないか（「分岐」するのははたして「時間」か）といった懸念も示された。

とはいえ、本稿が、学的な堅実さと独創性とをきわめて高い水準で実現した希少な哲学的論考であることはまちがいになく、審査委員会一同は、青山君の本学位請求論文が本文学研究科の学位授与にまさにふさわしいと判断するものである。

平成28年2月22日

審査委員会一同

なお、青山拓央君の学識確認を以下のとおり行なった。

学識確認 慶應義塾大学文学部教授 柏端 達也
文学研究科委員